

* 県民会議会長賞

「誰のために生きるのか」

益田東高等学校一年 藤永まどか

私の母は、自分のことを後回しにしてでも、人のために頑張ることができる、そんな人です。私が生まれたフィリピンでは、毎日がギリギリで生活に苦しんでいる人がたくさんいます。母はそんな貧しい人を見つけると、ご飯をあげていました。

私たち兄弟四人と両親は今、日本で暮らしています。みんなで韓国旅行に行った時も、母は道端のおじいさんにお金を渡しながら泣いていたのです。母国にいる両親に仕送りをしているので、自分の両親と重なったからなのでしょう。ご飯を残そうとすると、世界にはご飯を食べたくても食べられない人がいるのだから、きちんと食べなさいと言います。幼い頃の貧しい生活を目の当たりに見てきた私なのに、食べ物を粗末にしている自分がいるのです。恵まれているはずの生活までも満足しない自分がいたのです。お金に困っていないのに、どうして忙しくしているのか聞くと、ずっと一緒にいてあげられるわけじゃない。私たちがいなくなっても困らないようにしたいから。今の生活も当たり前ではない。すべてのことに感謝して生きていきなさいと。私は、母のこの言葉をずっと心の奥にしまっています。まだ一度も親孝行をしていません。母が教えてくれていることは、誰かのために生きることの大切さと、当たり前が当たり前でできることへの感謝なのでした。

*入賞

「心強く生きる」

益田東高等学校 三年 堀井幹太

野球がしたくて京都から島根の高校へ来た今年の六月、父から一本の電話で「おばあちゃんが亡くなった」と。夏の大会とコロナもあって、大好きだった祖母のお葬式には行けませんでした。引退して真っ先にお墓の祖母のもとへ行き、「ありがとう、そしてゴメンね」と言いました。兄と姉は社会人で直ぐ上の兄は学生で、僕は四人兄弟の末っ子です。小学生の時、交通事故で車いす生活をした僕を家族全員が側について支えてくれました。経済的に負担をかけるのではと思いながら、大学で野球を続けたいと言うと「やりたいと思うなら頑張りなさい。」と父はすんなり言ってくれました。本当に平穏な家庭でした。

しかしこの九月、両親とも大腸ガンだと宣告されたのです。母が先に手術をして数日後には父が手術。ふたりとも一命は取りとめました。ふいに襲ってきた恐怖でした。僕の母は、手先が器用で靴や服など何でも作ります。母の「大丈夫だよ」という言葉に僕は心が落ち着いて「ありがとう」と答えました。大切な人を失ってから後悔することのないよう父と母を大切にして、感謝の気持ちを素直に言動で伝えたいと思います。次から次へと心が折れるようなことばかりで、高すぎる山や暗くて厚い壁がたくさんやってきますが、その先にある「希望」に向かって、これからも前を向いて歩み続けていこうと思います。